

コロナに負けるな こんな時だからこそ “できる親切”を Part2



ねぶた模様のマスクと幸せを呼ぶ鈴

の魅力を伝えるパンフレットを作って贈りました。

マスクは、同校家庭クラブ委員会がハネトの衣装に使う布地で手作りし、ハネトの衣装につける鈴も制作。マスクの作り方は、同校ホームページで公開されています。

また、家庭クラブ委員会はボランティア委員会と合同で、水玉柄などかわいい布でマスクを作り、二つの保育園の園児に贈りました。

*2 青森ねぶた祭は、毎年8月2日〜7日の6日間の日程で開催され、のべ300万人もの観光客が訪れる。雄大で迫力満点、大きなもので5メートルにもなる「ねぶた（山車灯籠）」が町を練り歩き、その周りで「跳入（ハネト）」と呼ばれる踊り子たちが、「ラッセラー、ラッセラー」の掛け声で跳ねながら

新青森駅で 元気を届ける

踊り歩く。また、誰でもハネトの衣装を着用して自由に参加可。
*3 ハネトの衣装についている鈴は、跳ねると「シャン、シャン」と音が鳴り、ハネトたちの踊りを盛り上げる。近年、観光客に鈴を拾うと幸せになると人気となり、「幸せを呼ぶ鈴」と言われるようになった。

7月 在来線改札口前に、七夕飾りと織姫とひこ星の間を流れる天の川をデザインしたボードを設置。そこには、願い事を書いてもらう短冊や星の形をしたメッセーजीカーを用意しました。

1週間で200枚もの短冊やメッセーजीカードがなくなるほど大好評で、東京に大学生の息子がいるお母さんは家族の健康を、駅長さんは「たくさんのお客様が戻ってきますように」との願いを書きました。

8月 ねぶた祭は中止となりましたが、少しでも青森の夏を感じてもらおうと、ねぶた祭の正装で、新青森駅新幹線ホーム・コンコースでお出迎えお見送りを実施。後日、新聞に次の投書が掲載されました。

高校生の おもてなし



妖怪「アマビエ」のイラスト

感染予防と 青森の魅力発信

5月 新青森駅構内に、「あいだつこあけてすわりへ」（間を空けて座って）など津軽弁を用いた、3密の注意やマスクの着用を呼びかけるポスターを描いて掲示しました。

このポスターには、疫病を払うとされる妖怪「アマビエ」のイラストも描かれ、アマビエをめくると、コロナの収束を願うメッセーजीが読めるなどの工夫もあり、利用客の目を

新型コロナウイルスの感染拡大で打撃をうけた観光業への支援策「Go Toトラベル」が東京を含めて10月1日にスタートしました。東北新幹線の終点であり、北海道新幹線(函館北斗駅行)の起点にもなっている新青森駅には、どのような人たちが降り立ったのでしょうか。この駅では、地域のために、観光客のために県立青森西高等学校の有志団体「おもてなし隊」(58名・通称青西おもてなし隊)が様々な活動に取り組み、青森の魅力を発信しています。

*1 妖怪「アマビエ」は、長い髪にくちばし、うろこを持つ3本足をした半人魚の妖怪。江戸時代に肥後（熊本県）の海に現れ、「病気が流行したら、自分の姿を描いて人々に見せよ」と告げて、海中に消えたとされる。コロナの感染拡大で、SNSを通じて全国に広まる。厚生労働省の感染予防啓発サイトのアイコンとしても活用される。

6月 昨年交流した台湾の修学旅行生や同隊がガイドを引き受けたクルーズ船の観光客らに、青森を思い出してもらおうとマスクや青森

マスクは 日常生活の 必需品

今は簡単に手に入るマスクですが、一時期はマスク不足が深刻な社会問題となりました。手にはいらないなら自分で作ろうとマスクを手作りする動きが広がり、それと同時に、全国各地でマスクをめぐる温かな心の輪が広がりました。

マスクのエール

岩手県立釜石高等学校(449名)は、手作りの布マスク約400枚を

釜石市長に贈呈しました。このマスクは、1年生が中心になって、家庭科の授業や休み時間を利用して手作りしたもの。この贈呈を皮切りに、

長兄の死去に伴い、十数年ぶりに故郷・青森に帰省した。初七日も無事に済み帰路についた際、新青森駅の北海道新幹線の改札口の前で、県立青森西高等学校の「青西おもてなし隊」がハネトの衣装でもてなしてくれた。ハネトの衣装につける鈴と、小さなプラスチック板にねぶた絵師を目指す生徒がデザインした武者絵の顔を張り付けたものも無料で配布していた。爽やかな青西校の生徒と「幸せを呼ぶ鈴」のおかげで、長兄の死で打ちひしがれた傷痕も少し元氣を取り戻し、新幹線に乗ることができた。家につき、「幸せを呼ぶ鈴」を鳴らしてみた。「ねぶた」にまつわる長兄との様々な思い出がよみがえってきた。「ねぶた」は中止となったが、「ラッセラー、ラッセラー」の掛け声に見送られ、父母の待つ天国へと旅立ったことだろう。(北海道帯広市 H / 一部抜粋)

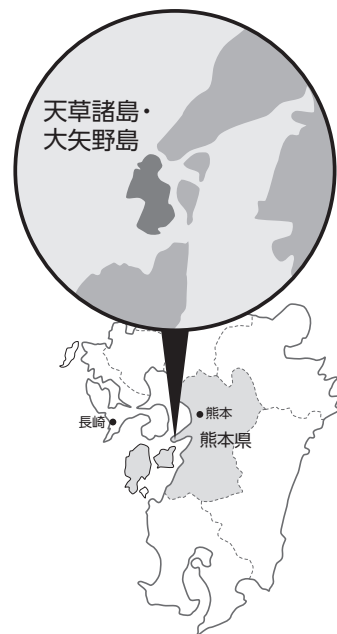


「かまいし学生エール便」の
内容イメージ (釜石市HPより)

その後もみんなでこつこつマスクづくりに励みました。釜石市は、新型コロナウイルス感染症対策学生支援事業として、釜石市出身の学生を対象に『かまいし学生エール便』として特産品（1万円相当）を送り、学生生活を応援。同校から贈られたマスクもこの中に詰めて、届けられました。

「釜石出身の先輩たちに役立ててもらえるのは嬉しい」との思いは、コロナにより大学に通えずオンラインでの授業を余儀なくされている学生たちに、故郷からの力強いエールとなったことでしょう。

コロナに負けるな こんな時だからこそ “できる親切”を Part2



岩手県では、このほかにも盛岡市が県外在住の大学生らを対象に『もりおかエール便』として特産品を贈りました。

全国で唯一コロナ感染者ゼロの記録を続けた岩手県には、こんな思いやりが息づいていました。

上級生からの プレゼント

熊本県上天草市立上かみ小学校のある大矢野島は、美しい海に囲まれた自然豊かな天草諸島の島々の中で3番目に大きな島です。

同校の6年生は、38名の新入生を迎える入学式を心待ちにしていま

したが、新型コロナウイルスの感染予防のため、入学式に参加できなくなりました。残念な気持ちでいると、先生から「手作りのマスクをプレゼントしてあげよう」との提案が。

そこで、春休みを返上し6名がミシンを使ってマスク作りに励みま

白のチェックのマスクに、「一緒に遊ぼうね」などの手書きメッセージを添えて、38名分をビニールケースに入れて完了。マスク作りには先生が、ビニールケース入れには6年生の仲間が手伝ってくれました。

入学式は少し寂しかったけれど、お兄さん、お

姉さんからのマスクをつけた新入生たちは、元気に学校に通い、学校生活を楽しんでいきます。

運転手さんの心遣い

渡部敏弥さん（55歳）は、東京・三和交通(株)の運転手さん。マスクを忘れ困っていた乗客のご婦人に、予備のマスクを差し上げたところ、その翌日、渡部さんのもとに「感謝御礼」と達筆な文字で書かれた礼状が寄せられました。

そこには91歳との年齢が書かれており、「手をよく洗って書いております」とのユーモアあふれる一文が添えられていました。

昨日は、NTTドコモ前までお世話になり、誠にありがとうございました。マスクを忘れ、愚痴をお耳にいれ恐縮でしたのに、信号「青」で横断歩道を渡ろうとしていた私に、渡部様が駆けつけ「マスク」を渡してくださったことに驚くとともに有難く思いました。NTTドコモで、大声でその出来事を話してしまいました。担当者は、「よいお話ですね」と驚いていました。

現在貴重なマスクを有難うございました。

(東京都文京区M)